

京都精華大学国際マンガ研究センター・KOMACON共催

第3回国際学術会議

「マンガの社会性 経済主義を超えて」

キーノート・スピーチ

2011年9月14日夕方

ジャクリーヌ・ベルント

今回のような国際学術会議を、年に1回、企画すること、また、博士課程での研究や論文を指導することのために、私は2009年度に京都精華大学マンガ学部に移籍しました。その前まで15年間ほど、日本のいろいろな大学でマンガ論を含む講義を行っていましたが、マンガ、そして作家育成に専念する学部ははじめてのことでした。このマンガ学部という環境は、一方で、理論的なマンガ研究に携わっている者にとってとても魅力的ですが、他方でマンガ研究の現状をめぐる限界をも痛感させます。京都精華大学に限らず、他大学や他国にも当てはまると思われまますので、それをごく簡単に言及させていただきます。

まず、魅力についてですが、以前所属していた産業社会学部や教育人間科学部では、理論系の学生を相手にお互いに刺激的な授業はできましたが、同僚の先生はマンガに関心があっても、マンガについての共同研究にコミットするほどではなく、さらに、場合によってマンガ研究自体を、その学術性の物足りなさのために見下す態度も取っていました。ここでいう「学術性」とは、決して一次資料の丁寧な把握に限りません。また、科学者側から強調されそうな「客観性」と「再現性」をも指していません。人文・社会学の分野において最も先端的な研究者と交流するためには、マンガ研究を他分野での論考へと接続し、このような橋渡しを可能にする方法論的知識と工夫が求められています。つまり、肝心なのは、研究対象自体だけでなく、それを追究する方法やこの方法の歴史的・理論的枠組みです。そして、研究対象自体は、時代と諸言説から切り離された、いわば「純粋な」形で存在せず、視点によって必然的に変わるということに対する自覚です。従って、自分の研究対象に対してどのような視点が既存していて、その他にどのような視点がありうるかを意識しながら、自分自身の切り口（あるいは視点）を定めることによって、研究対象がはじめて学術的な「研究対象」として成り立つのです。言うまでもなくそれは研究方法にも当てはまります。例えば、近年、注目を浴びつつある電子マンガを、一体どのような意味で「マンガ」と呼んでよいのかを検討し、韓国特有の現象として評価される学習マンガが一体どのような「学習」を薦めているかを疑問に晒さない限り、マンガ研究は、実用的な存在意義があるかもしれませんが、必ずしも学術的ではありません。ちなみに、視点の多様性よりも明確で一義的な意味伝達を要求することは、日本の大学・専門学校の作家育成の専攻にもよく見当たります。業界や読者のニーズに対応するためのこのスタンスは、実技系院生が学術的論文を書く際、かえって困難をもたらします。根本的に視点の多様性を認める言説分析に慣れていないからです。

「学術的マンガ研究とは何か」についての考察は、2000年に京都精華大学と共同で立命館大学で開催したシンポジウムに遡ります（「マンガ研究特集」、『立命館言語文化研究』13巻1号、2001年4月発行を参照）。その後、日本マンガ学会は設立されましたが、しかし、そこでも前述の「視点性」や「方法論」

に対する自覚はいまだにそれほど重視されていません。換言すると、成長しつつある「マンガ学」は、一般のマンガ論を特徴づける一面化を乗り越えていないと言っても過言ではないでしょう。この一面化は、ゼロ年代以降、最も注目を集めた研究に見出せます。それは、まず第1に、マンガのグローバル化についての研究であり、そして第2に、オタクや腐女子といったファン・カルチャーをめぐる調査研究ですが、最後に第3に、コンテンツ産業として分析されるマンガに当てはまります。

第1点目の「グローバル化」は、日本からコンテンツを発信する側面から主に追求されてきましたが、近年、海外における独特な受け入れ方も注目されています。しかし、それと日本国内のマンガ文化との関係、つまりマンガの海外進出が日本国内のマンガ文化に何をもたらすかがほとんど問題視されないという「一面化」が目立ちます。ところが、2010年に話題になった「非実在青少年」問題、特にヤオイを規制しようとする東京都条例は、明らかにグローバル化に裏づけられています。上記で第2点目として挙げたオタクと腐女子は、実際、日本特有の文化に限らず、きわめてグローバルな文化を形成しているのです。馴染みのない方には、例えば、ヤオイ・マンガが、カトリック教会における「ペドファイル」と類似したものに見えるかもしれませんが、それに対して「腐女子」（あるいは腐男子）の若手研究者は、ヤオイ・マンガが、写実的表象ではなく、むしろ作品同士およびファン同士の関係性を中心に据えるものだとして主張し、ヤオイ活動から得られる「健全」な元気づけを強調したりしています。

ところで、学術研究には、本来、腐女子のような情動的共同体 [affective community] のアイデンティティ・ポリティックスを後押しする努力に止まらず、広義の「社会」の視点をも取ることが期待されます。従来の腐女子研究は、特にジェンダーやセクシャリティをめぐる社会問題を照らし出してきましたが、プレカリアートや人種差別といった問題にまでは、視点を必ずしも広げていません。それは、少なくとも、近年、多くなってきた学術論文に見当たる傾向です。ただし、東日本大震災やそれによる原発問題に直面している現在、大きな「社会」を考慮に入れず、自らの共同体内のみ視点留めちなファン・カルチャーを捉え直す必要が生じているのではないのでしょうか。

最後にコンテンツ産業という3点目ですが、プチョンのマンガ博物館ほどそれと関連づけられていない京都国際マンガミュージアムさえ、その一例になるでしょう。このミュージアムは、京都精華大学と京都市、龍池自治連合会といった3者の学公連携によって設立され運営されていますが、象徴的なことに、2010年秋、京都市はその担当を、教育委員会生涯学習部から産業観光局産業振興室に移したのです。それを念頭におけば、マンガは、芸術あるいは教養そのもの、さらに社会における異なる者同士の交流や社会批評のメディアとして重視されなくなっていることを結論せざるを得ません。この傾向は、ある程度まで、マンガをめぐる大学教育において「作家育成」を「読者育成」に優先することにも現れています。最後にそれに関して例を挙げさせていただきます。

福島第一原発の事故以来、海外のコミック研究者は、日本のマンガとアニメがずっと原爆や災害による破壊の風景を描いてきたのに、日本人がそれを現実の可能性として捉えていなかったのかということに驚いています。それに加え、最初に翻訳された日本マンガとして1970年代末以降、海外に普及していた『はだしのゲン』は、すでに長年、日本の学校図書室に置かれているのに、読者の過半数に原子力の危険性を意識させなかったのかという疑問も挙げられています。ここに「読者育成」の重要性を窺うことができるでしょう。これまで、原発問題を社会問題として取り上げるマンガ家がいなかったわけではないからです。例えば、山岸涼子の「パエトーン」（1988年、書き下ろし、あすかコミックス）を初期の例に挙げられます。また、2011年2月以来、虚構の「東都電力」による原発とその下請けシステムの危険性を暴露していた「白竜～LEGEND」（原作：天王子大、劇画：渡辺みちお；『週刊漫画ゴラク』）も啓蒙的な役割を果たし得たはずですが、「3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震による被害状況に鑑み」3月18日発売の号で中断になったこの文字通りの「劇画」は、3月11日以前から原発の闇を照らし出していましたが、一昔前の「ヤクザ・マンガ」を連想させるその親爺的画風によって読者層が限られ

ていたと思われます。しかし、『週刊漫画ゴラク』誌の想定読者層をみても、この「原発マフィア」シリーズを果たして現実の社会問題と関連づけて受け入れたのか、という疑問が残ります。

いずれにしても、最近の現状を踏まえた上で、マンガやマンガ研究のあり方を再検討する必要性が生じていることは確かです。歴史がまだ浅いマンガ研究は、一方ではビジネス、他方では国家政策に結びつくからこそ、社会的有用性をもつという常識が根強いです。しかし、今現在、求められているのは、(企業であれファン共同体であれ) 個別の利害を超えるような意識への貢献です。まさなこのような研究者としての意識を、本会議の企画で「社会性」と呼ばせていただきたいと思います。